

第 1 回大崎地区における高校の在り方検討会議での意見等

1 高校の現状や取組について

(1) 生徒の状況など高校の現状に関すること

- 専門学科の生徒は目的意識や学習意欲が高いが、普通科は目標が定まっていない生徒が多い。
- 学習意欲やコミュニケーション能力の部分で問題を抱え、中学校でも学校生活に適応できなかった生徒も入学している。
- 農業科の生徒は非農家の生徒であっても農業を学びたいという動機で入学している。
- 総合学科では、1年次に職業実習を行い、それを参考に2年次に4系列から系列の選択を行う。

(2) 学習指導や生徒指導での取組に関すること

- 卒業後に社会に出て通用することを目標に、学び直しの授業やコミュニケーション能力を高めるような取組を行っている。
- 教員だけでは対応できない生徒や家庭の問題に対してはスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどの外部資源を活用している。
- 小規模校は教職員数や予算面で不利な面もあるが、全ての生徒に目が届く生徒指導ができるという利点もある。
- 経済社会の発展を担う人材育成を目標とし、キャリア教育や起業家教育に力を入れている。
- 生徒の進路の状況や町の要望から3年生の選択科目に理系、文系のほかに看護医療系、福祉系のコースを設け、町の施設の協力を得て実習も充実させていく。
- 「しっかりと話せる、考えて話せる」人材の育成の観点から、「アクティブラーニング」を実践している。

2 地域との関わりについて

- 高校生は地元のお祭りへの参加や町の事業に協力するなど地域との関わりが深いため、住民にとって身近な存在で小中学生の手本にもなる存在であり、地元の高校としての思い入れも深い。
- 町の要望が学校の学習内容にも反映されており、町としても町民バスの運行の面でバックアップしている。
- 地域貢献の一環として、ジュニアスポーツ教室を開催している。
- 地域住民との協働学習として「フラワーサービスプロジェクト」を展開している。

3 地域として望まれる学校について

(1) 学習内容に関すること

- 地元の病院や介護施設と連携して、看護師や介護士など高齢社会で不足する人材の育成を行う高校が望まれる。
- 知的障害のない発達障害を持つ生徒や不登校の生徒を支援する環境整備が必要である。
- 少子化から再編統合はやむを得ないが、商業を基軸とした総合ビジネス高校が望まれる。
- 普通科と職業系学科のバランスに配慮し、職業系の学びの機会を確保すべき。

(2) 地域性等に関すること

- 大崎地区の生徒に選ばれる学校づくりのほか、仙台方面からのアクセスの良さも考え中部地区の生徒からも選ばれる学校づくりが必要である。
- 地元のイベントへの参加や市町のまちづくりの施策に関心を持つなど、地域に関わりを持つことは高校生にとっても自分の将来を考える良いきっかけになるので、地域との関わりを持った高校を目指すべきである。
- 再編はやむを得ないが、東西に広い地域性から通学への影響を考慮しながら特色ある学校づくりをすべきである。

4 その他

- 再編はデリケートな問題であり、生徒の通学やこれまでの学校の取組も考慮した丁寧な議論が必要である。
- 改めて地元の意見を聞く機会を設けるなど、再編には丁寧な対応が求められる。
- 小中学生が高校生のイメージを持てるような取組が必要である。
- 少子化に伴う再編は仕方がないが、地域に与える影響を考慮すべき。
- 現在、小規模な学校に入学してくる生徒の実態も考慮し、効率性だけで再編の議論を進めるべきではない。
- 参考として、東部、西部、旧古川市部のブロックごとの中学校卒業生数の見込みを示してほしい。